時代小説と北海道

歴史を一気にさかのぼり、過去を疑似体験できる時代小説。明治時代に開拓が本格化した北海道を舞台にした作品は少ないと思われがちだが、幕末期を中心に多彩な作品が数多く存在する。函館生まれで道南を舞台にした時代小説のほか、警察小説など幅広いジャンルで活躍する作家の富樫倫太郎さんと、7月に「時代小説で読む！ 北海道の幕末・維新」を出版した、哲学者で作家の鷲田小彌太さんに、北海道を舞台にした時代小説の魅力を語ってもらった。

富樫 自由に泳いで書く
鷲田 近代の意識変えた

■奥深さ

鷲田 かつて時代小説は通俗小説で、歴史小説は歴史の材料を咀嚼して書いたものという分類があった。それが司馬遼太郎さんの出現によって変わりました。僕は小説には、時代小説と現代小説しかないと思っています。そして時代小説であろうが現代小説であろうと、舞台となる時代の歴史という枠組みをはずしたら書けない。時代小説は事実として受け取られる側面が強いけど、すべての作品はフィクションなんです。歴史家に比べ、時代小説の作家、小説家の方が歴史に迫る力を持っていますね。

富樫 歴史家はあまり想像しないで「ここにこう書いてある」と信じて書いていくやり方なので、逆に真実から離れることがあるのかもしれません。たとえば倒幕の中心人物で明治維新の元勲のひとり大久保利通は精密で膨大な日記を残しているが、日記をうのみにすれば、歴史の真実から離れる可能性がある。自分の日記が読まれることを意識して、知られたくないことは書いていないからです。フィクションだからこそ真実に迫ることができると思うんです。

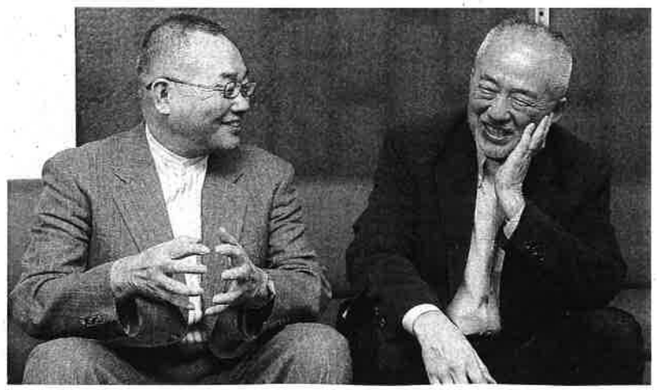
鷲田 大久保さんは政治家ですからね。日記も自分がいかに世界に有用な人間だと知らせようと思って書いたのでしょうね。

富樫 ただ、基本的に歴史物は調べないと書けません。一方で歴史は底なしにいくらでも調べられ、それを書けばなんとなく小説っぽくなる。でもそういうものは面白くない。そしてあると、分からない部分を書くことが小説の楽しさだと気が付きました。記録が残り、動かしがたい真実はあるが、細部までよく分からない時期がある。それを想像力で埋めていく作業は楽しいものです。たとえば箱館戦争。箱館に上陸した土方歳三が6カ月、どういう日々を送っていたかは分かってません。その部分を想像して話を組み立てたのが「箱館売ります」です。

鷲田 時代小説は小説家が描くフィクションの部分が人を説得します。近代社会で私たちの意識を変えたのは歴史家ではなく、時代小説の力が大きいと思いますね。

富樫 僕が時代小説を書いたのは、歴史が好きだから。でもミステリーも好きなので警察物も書く。時代小説は前提になるしきたりや当時の風習を押さえれば、ものすごく自由に書けるんです。

真実に迫る想像力



作家 富樫 倫太郎さん

とがし・りんたろう 61年、函館市生まれ。北大経済学部卒。98年「修羅の登（あしおと）」で歴史群像大賞を受賞しデビュー。「箱館売ります」や「軍配者」シリーズなど時代小説のほか、警察小説の「SRO 警視庁広域捜査選任特別調査室」シリーズなど。千葉市在住。

哲学者 鷲田 小彌太さん

わしだ・こやた 42年、札幌市生まれ。大阪大文学部哲学科卒。三重短大教授を経て、12年まで札幌大教授を務める。専攻は哲学・思想史。「昭和の思想家67人」「漱石の仕事論」など評論や人生論、時代小説をテーマにした著書が多数ある。空知管内長沼町在住。

■ 対談で紹介した作品 ■

「箱館売ります」「松前の花」「神威の矢」（いずれも富樫倫太郎著、中公文庫）
「時代小説で読む！ 北海道の幕末・維新」（鷲田小彌太著、亜璃西社）
「私の庭」（花村萬月著、光文社文庫）
「林蔵の貌」（北方謙三著、集英社文庫）
「狄（てき）」（網淵謙錠著、中公文庫＝絶版）

富樫 無名の人に興味
鷲田 道内作家に期待

■題材

富樫 学生時代から小説家になりたくて、歴史を題材にしたいと思っていました。まずは身近なところからと、出身地の函館の郷土史や町史を読むことから始めました。そうして執筆した短編が「箱館売ります」かや「松前の花」につながりました。その後は平安、江戸、戦国、幕末といろいろな時代を題材にしました。

鷲田 北海道の歴史は開拓以降に凝縮されているから、身近すぎて書きにくい面があります。でも、富樫さんはそれを取り上げ、しかも作品の雰囲気がしゃれているのがいい。僕はミステリーと時代小説はつながる部分があると思うのですが、北海道出身のミステリー作家は北海道の時代小説をあまり書いていないのが残念。そういう面でも北海道の時代小説はこれからだと思いますね。

富樫 僕は、北海道でも米が作れるよう品種改良に尽力した井越和吉（1865～1932年）をモデルに書きたいとずっと思っているんです。彼は誰に頼まれたわけではないのに、石にかじりつくように品種改良に取り組んだ人物です。歴史に埋もれた無名の人に興味がありますね。

鷲田 北海道を舞台とした時代小説で、すごいと思ったのは花村萬月さんの「私の庭」。北方謙三さんの「林蔵の貌」、網淵謙錠さんの「狄」も面白いですね。このほかの北海道を舞台にした時代小説は、凝っているものが多い。小説なんだから、作家はもっと気楽に書いてほしい。

富樫 北海道を舞台にする魅力は、歴史があまり発掘されていないこと。「箱館売ります」では、広大な開墾地租借契約をめぐってプロイセンの貿易商との間で起きたガルトネル事件を取り上げましたが、びっくりするくらい知らない人が多かった。一方で北海道に生まれ育った者として、アイヌ民族の問題は避けて通れないと思います。「神威の矢」は使命感から書きました。平和に暮らしていたアイヌ民族が和人に一方的に虐げられる歴史を取り上げました。しかし、アイヌ民族を迫害してきた歴史を正面から書いた小説は少ないように思いますね。僕もそうでしたが、調べた段階でつらくなってしまうからかもしれません。

鷲田 むしろ時代小説の方が、無意識のうちに本人が出るのでしょう。時代小説の方が怖いかもしれません。富樫さんは当分ネタ切れがなさそうですし、たくさん書いてほしいですね。

◇おことわり 「月曜討論」「記者の視点」「風論説委員室から」は休みました。

富樫 自分と似る傾向
鷲田 諭吉晩年面白い

■人物像

富樫 土方歳三は複数の作品で取り上げています。人物が分かりやすくて好きですね。幕末は裏切りと寝返りが連続した時代。土方はそれと距離をおいて「幕府から金をもらっているから、幕府のために戦う」と。周りが裏切っても、最後まで態度を変えない。結局、蝦夷五稜郭政府の幹部で死んだのは土方だけで、あとはみんな降伏して生き延びるわけです。でも対照的とされる榎本武揚も印象と違って面白い。総帥なのに五稜郭で4畳半の狭い部屋に自ら望んで暮らしていたなど、愉快なエピソードがたくさんあります。

鷲田 僕は土方歳三はいなかっぽくてあまり好きになれません。榎本は軍人じゃなくて外交官ですよね。僕が誰かにぜひ書いてほしいと思うのは北海道開拓使長官だった黒田清隆。彼が起こした開拓使官有物払い下げ事件は「明治十四年の政変」のきっかけとなりました。でも、あのとき北海道で払い下げが行われていたら、もっと自由な社会になっていたと思うんです。

富樫 北海道の歴史上の人物ではシャクシャインに関心があります。アイヌ民族が和人と対等に戦った事例で、むしろ優勢に戦いを進めたのに、最後はだまされて手打ちになった。エンターテインメント小説にしても面白いと思いますね。

鷲田 僕は福沢諭吉の晩年を書こうと思っています。かなりインチキで晩節を汚している部分に焦点を当てたい。勝者か敗者かに分類すれば、諭吉は勝者。だけど政府の金を引き出してきて慶応義塾だけは残そうとしたり微妙な面もある。

富樫 今連載している時代小説では、北条早雲、新撰組時代の土方歳三、吉田松陰らを書いています。司馬遼太郎さんの小説が好きなので、司馬さんが書いた時代は避けていたのですが、今は司馬さんが書いていない部分を書くようにしています。歴史上の人物を偉人と見てしまうと小説は書けない。自分と同じように、ご飯を食べ、排せつするという体温を感じないと。人間くささを感じる場面が必要なんです。司馬さんの短編はエピソードの積み重ねで、その辺に小説の秘密もあるのかなと思います。

鷲田 富樫さんが、司馬さんの小説が好きだとお聞きして、うれしく思います。司馬さんが面白いのは、時代小説で書いた自分の説も信用していない部分がかいま見えるところ。「ただの小説家」であるという立ち位置なのでしょうね。

富樫 僕の時代小説はせりふが多いのが特徴ですが、自分が考えたことを信長や土方歳三の口を通して言わせているだけ。歴史に題材を取っても登場人物は自分自身と似る傾向があるのかなと思います。

鷲田 むしろ時代小説の方が、無意識のうちに本人が出るのでしょう。時代小説の方が怖いかもしれません。富樫さんは当分ネタ切れがなさそうですし、たくさん書いてほしいですね。